文字の比較社会学・序

──「漢字」と「アルファベット」の形成と展開 ──

鵜　飼　大　介

1．社会学的対象としての文字

本論は、文字というものの歴史的・社会的な存立構造を捉えようとする試みである。これまで社会言語学の一部では、文字の社会的な機能や効果、識字率などを取り上げてきたが、従来よりも「文字」というものの存在に関わっている「社会性」と「歴史性」を包括的に捉えようというわけである。もう少し具体的に記述・分析したいことを挙げておくと、①歴史的・社会的環境における文字の形成、普及、および消滅の過程、②文字と社会制度（法・貨幣・宗教など）や、さまざまな社会領域における文字の使われ方、③文字と政治秩序（王権・帝国・近代国家など）や、そこで作用している権力の様態などである。

こうした試みでは、伝統的な文字論や文字学の知見を参照するとはいえ、それらとは考察の焦点がいささか異なる。文字学は文字（とりわけ漢字）の各字体の形状や来歴を、文字論は文字の言語的機能（言語的な意味作用）を主に扱ってきたわけだが、文字がかかわる権力作用や社会関係についてはどちらかといえば挿話的に触れるにとどまっていた。文字についての社会学はそれらを考察の中心に据える[1)]。

まずは、文字について現象論的ともいえる把握をしておこう。人が文字を読み書きする行為においては、視覚的な図像（の列）を見ながら、たんなる視覚的な現れ以上・以外のものをそこに見てとるわけで、言語的に同定される音や意味が看取されるのである。図像から読みとられる音ないし意味が示差的な体系を組織していなければ文字とは言えない。図像からもっぱら音が読みとられる文字が表音文字であり、音だけではなく意味も読みとられる文字が表意文字であると、さしあたり述べることができる[2)]。

もっとも酒井（1991=2002：360）が示唆するように、「表音」および「表意」は、いわば文字自体の「属性」ではない。図像は、それに接する人や場合によって、表意的にも用いられうるし、表音的にも用いられうる。ただし実際には、従来表音的に使われていた文字はたいてい表音的に用いられ続けるし、表意的に用いられていた文字は表意的に使われ続けるのが通常である。その点で、文字というものの存立や用法は、歴史的・社会的な拘束のもとにある。文字の存立構造を問うということは、結局、「文字」に接する人々の歴史的・社会的に拘束された認識や実践を問うということである。

当然でありながら重要なことは、文字は書かれることによって物質化するということである。

よく言われることだが、発せられた音声は物的な痕跡を残さずに消えていく。それに対して、書き記された文字は物質的な痕跡を残す。どれくらいの期間、痕跡が残りつづけるかは、書写材料やそれが置かれた環境次第だが、その痕跡は見た者に「読む」行為を誘発する（読めない場合もあるが）。書かれた痕跡は、書き手がまったく予期していなかった者に読まれることもよくあるし、書き手が属する共同体の時間的な範囲を超えて残ったり、その空間的な範囲を超えて人手に渡ったりすることもある。

メンバーが対面的な相識関係にほぼ限られるような小規模で単純な社会では、コミュニケーションは口頭による伝達とその理解でほとんど事足りる（さほど不自由が覚識されない）。ルーマンによると、口頭のコミュニケーションでは、コミュニケーションは相互作用と結びついており、伝達する者と理解する者は同時に居合わせねばならない。しかし文字が発明され普及すると、文字によってコミュニケーションの「非同期化」が可能になる（Luhmann 1997=2009: 1116）。伝達する者（書き手）と理解する者（読み手）は同時に居合わせなくてよい。非同期的なコミュニケーションを可能にする文字は、複雑で大規模な社会の存立と維持を補助するような媒体となりうる。

文字は（とりわけ先進国では）日常生活の隅々で使われ、近・現代的な諸制度のいたるところで活用されているため、かえってその特徴は捉えにくい。近代的な文字の様相を捉えるためには、近代以前の社会 ── 文字を使うことが当たり前ではなかった社会 ── にまで遡って検討し、そこから近代社会へと変容しつつも受け継がれるものを見ることが望ましい。以下の小論ではその準備作業として、近代以前の文字について、とくにユーラシアの東西で形成された二種類の著しく異なった文字、いわゆる漢字とアルファベットに注目して、両者を比較・検討する。東西の「文明」の形成・展開期を比較するわけである。ただし、遠大な時間・空間に及ぶ話を一本の論文に収める必要上、なるべく簡潔に要点のみを記して見通しをよくすることに努め、細部を詳述することは別稿を期したい。

２．文字の二つの系統

今日世界で使用されている文字の系統をたどると、そのほとんどがフェニキア文字の末裔と漢字およびその派生文字の二つの系統に絞りこまれる[3]（町田 2011：10）。二つの系統は、文字の言語的機能としては表音文字と表語文字（表意文字）という点で大きく異なっているが、製字された場所がユーラシア大陸の西と東という点でも異なっている。

まずフェニキア文字の系統について簡潔に述べておこう。フェニキア文字は東地中海地域で形成された子音表記の文字であり、右から左へと書く「右横書き」が通例であった。フェニキア文字は西へと伝わり、それをもとにギリシア文字が作られ、さらに（エトルリア文字を経由するなどして）ラテン文字が作られた。ギリシア文字やラテン文字は、子音のみならず母音をも表記する表音文字で、いわゆるアルファベットである。初期のギリシア文字には牛耕式書法もみられるが、次第に左から右へと書く「左横書き」が定着し、ラテン文字も「左横書き」を継承した。こ

のラテン文字は後に、文字の近代的な標準形態となっていく。

フェニキア文字の系統は東方にも波及していった。フェニキア文字をもとにアラム文字、アラム文字をもとにソグド文字、ソグド文字をもとにウイグル文字が製字された。書字方向は一般に「右横書き」であるが、ウイグル文字と一部のソグド文字は ── 漢字・漢文の影響もあると思われるが ── 縦書きもなされた。13 世紀頃にはウイグル文字からモンゴル文字（書字方向は「左縦書き」）が作られた。そして 15 世紀半ばに作られた訓民正音（後のハングル）、16 世紀末頃から 17 世紀における満州文字の形成に至り、フェニキア文字の系統はユーラシアの東端にまで到達したことになる。アラム文字やソグド文字は、基本的には子音を表記する表音文字であるが、ウイグル文字やモンゴル文字では母音も表記する。

なおフェニキア文字、アラム文字、ヘブライ文字の初期形態は似かよっている。これらはいわば東西の分岐点にあたる諸文字であり、ここからフェニキア文字の系統の文字群は東西に分岐して広がっていったわけである。ギリシア文字を参照しつつ作られたグラゴル文字やキリル文字を考慮すれば、フェニキア文字の系統は北方にも波及したといえよう。総じて、この文字の系統は諸々の共同体を横断して広がっていったのであり、いわばその波及力は際限がない。

他方で、漢字の系統はどうだろうか。漢字からの派生文字については次のようにまとめることができる。唐帝国が衰亡した後、10 世紀頃から中華帝国の周辺で女真、契丹、西夏、チュノムなど、漢字を参照しつつ独自の文字が形成されていった。日本における仮名文字も、同様の動向のもとで形成されたということもできる。とはいえこのような漢字の影響力は、あくまで中華帝国の周辺部までにとどまり、その範囲を超えて波及しえなかった。フェニキア文字の系統が、西の系統にせよ東の系統にせよ、各地の共同体を超えて展開していったのに対し、漢字の系統はあくまで漢字を中心とした中華世界の周辺部にとどまった。思い切って言えば、前者には後者のような閉鎖性が見られない。

次節に入る前に、古代メソポタミアにおける文字群についても瞥見しておこう。いわゆる「肥沃な三日月地帯」を中心として、東のインダス地方や西のエジプトなどとそれなりに交流しながら、独自に文字および文字文化が形成された。シュマント＝ベッセラは、メソポタミア地方において新石器時代の粘土製の計算道具（トークン）から楔形文字が形成されるまでを跡づけている（Schmandt-Besserat 1996=2008）。近くに参照・借用できる文字体系がない状況で、独自に文字を生み出すには、かなりの長い期間と過程を要した。トークンのシステムの発展と楔形文字の誕生とを結びつけるシュマント＝ベセラの説はさまざまな批判にさらされたが[4]、彼女の説への賛否はさておき、トークンが物財の出納管理に用いられたことは間違いなく、そこからは当時の交易や再分配の様子がうかがえる。交易や再分配といった物資の移動や保管をともなう場面で、楔形文字は作られ使われていったと考えられる（常木 1995：151–154）。

もうひとつ重要なのは、都市化と文字化との関連である[5]。同地方で紀元前 3200 年頃に使われ始めたと思われるシュメル文字は、ウルクの都市跡から出土した。ウルク市は長い城壁に囲まれ、当時としてはきわめて大規模な都市であった[6]。当時の社会において、城壁に囲まれた都市

空間は、城壁の外の世界とは区別された例外的な空間であったにちがいない。人々が集住し、物資や情報も集積した都市において、文字体系が組織され、書かれたテクストも集積していった。紀元前のこの地域の様子が、今日いくらかでも窺い知れるのは、主として粘土板に刻まれたおびただしい楔形文字資料のおかげである。

とはいえ楔形文字（群）は古代文字であり、さきほど述べたフェニキア文字の東の系統に属するアラム文字、さらに後のアラビア文字などにとってかわられた。楔形文字はウル・ナンム法典やハンムラビ法典など、複雑化した社会関係を統治するための法規範を記したという点でも興味深いが、紀元後にはほとんど使われなくなり、以後の歴史にさほど重要な影響を及ぼさなかったので、これ以上は述べないこととする。

３．東地中海地方（西ユーラシア）におけるアルファベットの形成と展開

まずはいわゆる「アルファベット」の形成の歴史過程や社会状況を見ておきたい。アルファベットはエジプトの文字に由来するという説が有力である。

エジプトの古代文字において、表音化（表音文字化）はある程度進んでいた。ヒエログリフでは表意文字（表語文字）がまず作られて、これが表音文字に用いられたのである。２音以上を表す文字が登場した後、単音を表す文字が最後に現れた。ヒエログリフの表記法は整然としたものではなく、単音を表す表音文字、２音・３音を表す表音文字、表意文字、決定詞[7] などが混用されていた（加藤 1962：58-59）。加藤は「エジプト人が、表意文字や２音・３音の表音文字とならんで単音の表音文字を発明していなかったら、セム人がアルファベットを発明しえたかどうか疑問である」と、ヒエログリフがアルファベットの形成に及ぼした意義を示唆している（加藤 1962：195）。

古代の地中海東部地域では、さまざまな文字が作られ用いられた。紀元前 18 世紀（もしかするとそれ以前）から、前 12 世紀頃まで使われた文字群があり、それらは「クレタ＝ミュケナイ文字」と呼ばれることもある。クレタ聖刻文字、線文字 A、線文字 B などがそれに含まれる。線文字 B が刻まれた粘土板には、さまざまな物資の数量や種類が記録されている（Chadwick 1987=1996: 55-75）。この文字は、贈与や（王権を中心とする）再分配機構において物資の移動や保存を管理するために用いられたと考えられる。なおそれらの後に出現したキュプロス音節文字は、紀元前８世紀から前３世紀頃まで使われたと推定され、線文字 A ないし B から派生した文字と考える向きもある。

いささか興味深いのは、地中海東岸の都市ウガリットで発見されたウガリット文字であり、これは表意性をほぼ完全に脱色した表音文字である。音節文字３文字を除いて、残りは子音を表記する文字であり、「ウガリット・アルファベット」と呼ばれることもある[8]。この文字は楔形文字の系統に属しており、メソポタミアで生まれた元来は表語的な楔形文字も、地中海東岸にまで移動と転用を重ねるうちにすっかり表音文字に変化したのである。また、その近くではアナトリ

ア象形文字と呼ばれる表語文字が使われていた形跡がある。以上のように地中海東岸一帯で痕跡が残っているものだけでも、文字を創出・転用する試みがいくつもなされたことがわかる。

当時、東地中海の周辺では人々の集団の移動 ── 交信や交易、抗争や植民 ── が顕著であったようである。「フェニキア」という名は ── 彼らの自称ではなくギリシア人等により付けられた名称だが ── エジプト語の「フェンク（造船者）」に由来する（加藤 1962：148）。船を用いた移動や交易、戦争などもさかんであり、人・物資・情報の移動や往来がおびただしかったと思われる。そうした移動を裏づけるようにフェニキア文字の資料は、極めて広い地域にわたって出土している[9)]。そのような社会的な「交通」が展開していく環境のもとで、フェニキア文字の体系が整えられ、広く使用されるようになっていった。

フェニキアの子音文字の一部を母音表記に転用することによって、ギリシア文字が作られたわけだが[10)]、フェニキア文字とギリシア文字について、ハヴロックの見解に耳を傾けておこう。

> フェニキア人は経済性を追求して、略記法を発明することによって数を減らした。それは音節を「セット」にまとめるというもので、各セットには、セットの頭子音を表す共通分母 ── ないし記号 ── があった（Gelb 1952: 148-149 は「西セム文字」に言及している）。たとえば［ka ke ki ko ku］のセットの 5 つは、すべて k の記号で表されることになる。記号は子音によるセットを表していたが、単独の子音 k を表していなかった。したがって、この体系を用いる読み手は、5 つの中から（あるいは、特定の言語で使われる母音の数や種類がどれほどであれその中から）、どの母音を選ぶか自分で決めねばならなかった。徹底した経済性（このような「アルファベット」はたやすく覚えられるだろう）は徹底した曖昧さという対価を払って得たのである。（Havelock 1986: 60）

> ギリシア文字の体系は、音節に含まれている発音されず、知覚されない要素を取り出すことによって経験主義を超えた。（…）彼らの創造によって、言語音のなかの発音されない要素が分離され、それに視覚的な同一性が与えられた。ギリシア人は「母音を付け加えた」のではない（これは広く見られる誤解だが、母音記号はすでにメソポタミアの楔形文字や線文字 B に出現していた）。彼らは（純粋な）子音を発明したのである。（Havelock 1986: 60）

母音と子音とを表記するようになったギリシア文字は、フェニキア文字が抱えていた「曖昧さ」を排したことになる。ハヴロックの挙げている例を用いれば、文中の k を［ka ke ki ko ku］のうちのどの発音で読むべきかを予備知識として共有していないメンバーにも、（少なくとも発音の仕方は）わかるようにしたことが、母音と子音を同定してそれぞれを表記する文字の特徴であり、特長でもある。すなわちフェニキア文字と比べて、音に関する曖昧さを排したギリシア文字の方が、前提的な知識を共有していない人々に対しても開かれていると言えよう。

このような紀元前の（東）地中海圏における文字の発展は、文字以外の社会事象とも関連して

いる。たとえば貨幣経済の展開がそれである。古代ギリシアに金属貨幣が導入されたのは、紀元前６世紀頃である。貨幣はさまざまな物を商品として、それらの価値を数量的に表現する媒体である。当時はまだ初歩的な貨幣（のシステム）であるとはいえ、貨幣は、「万物を否応もなしにひとつの等質化された尺度の上に順序づける外的な力」であり、〈普遍化する力〉として作用しうる（真木［1981］1997：165）。イオニア地方のミレトスは、地域間貿易にかかわる商業の中心地であり、貨幣と文字による交流は、真木の言葉を借りれば「当時の生成しつつある間・部族共同態的な秩序」（真木［1981］1997：164）を背景にしていると思われる。

貨幣には文字が刻印されることがあり、貨幣を介した取引の記録にも文字が使われうる。だが、貨幣と文字との親近性はそれだけではない。貨幣と文字はいずれも局所的・地方的な共同体を越境するように使われうるものである。両者ともに、（ときには相補的に）間・共同体的な交通を担う媒体となる。間・共同的な媒体（メディア）は、やがて局所的な共同体内の交換や交信にも用いられるようになっていった。

とはいえ、同時期のギリシア文字の体系はまだ完全に安定していたわけではない。たとえば、紀元前６世紀に刻まれたギリシア文字による碑文には、牛耕式書法 ── ある行を左から右に書けば、次の行は逆に右から左に、さらにその次の行はまた逆に左から右にというように書字方向を交互に変える書法 ── で記されたものが複数みられる（近藤 2003：129）。書字方向がまだ左横書き（左から右へと書く）の一方向に固定されていないのである。

古代ギリシアの哲学と文字との関連にも触れておこう。万物の始原（アルケー）をタレス（紀元前 7-6 世紀）のように水に求める、ある意味で素朴な知の形成に、文字の読み書きの習熟は必ずしも必要ではなかったかもしれない[11]。しかし、その後のアリストテレス（紀元前４世紀）にみられるような体系的な思索は、読み書きの習熟なくしては不可能であっただろう。

局所的な共同体の視野を超える思考が高度な水準に達すれば、普遍性を指向する知としての「哲学」となりうる。哲学的な思考において、思索された内容は複雑でありながらも一貫性を顧慮したものとなる。文章が書き記されれば、推敲によって言葉が選び直され、再検討を通じて内容上の非一貫性や不整合を除くこと、グディやオングの言う「後ろ向きの通覧（backward scanning）」ができるようになる（Ong 1982=1991: 207, 216）。読み書きの習熟が、複雑だが一貫性をもった思想体系の構築に寄与している。

ところで、プラトン（紀元前 5-4 世紀）は詩や詩人を批判している。ハヴロックによれば、プラトンが自身の考える理想国家から詩人を追放しようとしたのは、詩の朗誦が聴衆を熱狂させ、詩の内容を批判的に吟味することを阻むからである。詩は「知性を堕落させ」（Havelock 1963=1997: 278）、人々をドクサ（臆見）に埋没させる。朗誦される詩に聴き入る聴衆は、「物語と一体化し、それによって、あるときは正しくもなれば、あるときは不正にもなり、あるときには怒りもすれば、あるときには穏やかにもなるのである」（Havelock 1963=1997: 289）。当時の詩は記憶・朗誦されることによって、氏族的・部族的な共同体に一体感をもたらすとともに、共同体の知識を保存し、伝え、教えるもの ──「部族的なエンサイクロペディア」（Havelock 1963=

1997: 278）── でもあった。詩や詩人に対するプラトンの批判は、旧来の氏族的・部族的共同体の口誦的伝統や、それに基づく教育制度への批判でもあると、ハヴロックは述べている。こうした批判の背景には、口誦的伝統が残存しながらも、文字がある程度普及しつつあるという過渡的な社会状況がある（Ong 1982=1991: 170）。プラトンの『パイドロス』では、ソクラテスが文字のおよぼす効果について批判的な発言をしていることからも、そのような状況がうかがえよう。

当時は政治制度についても新たな形態が生まれつつあり、アテナイではソロンをはじめとする政治改革にみられるように民主的な政治制度が出現しつつあった[12)]。イオニア地方の都市国家では「イソノミア」という平等を重んじる政治制度もみられた。文字や読み書きの普及の程度は、地域や都市国家によって違いがあったとはいえ[13)]、当時の総体的な社会変容のなかでギリシア文字は形成され広まっていったのである。

白川は文字の表音化（表音文字化）について、次のように示唆している。「他の民族のもつ文字をかりて使うことは、文字の歴史の上では一般のことです。しかしそのときは、大体表音化して使う。つまりカナとして使うので、象形文字も音標化されてしまうのが普通です」（白川［1990］1996：463）。他の共同体で使われている表意的な文字に多少の変更を加えながら自らの共同体で用いる場合、もとの共同体の宗教や宇宙観と文字との関係が切り離されるとともに、表音化・脱表意化が進行する。このような文字の借用・転用を繰り返せば ── フェニキア文字やギリシア文字のような ── 表音性に徹した文字ができてくる。こうしてできた表音文字は、共同体の宗教や宇宙観と密着していないがゆえに、かえってさまざまな共同体の宗教や宇宙観を表現できるような普遍性の高い文字となった。

本節を閉じる前に、文字と宗教共同体との関係の一端について見ておきたい。フェニキア文字に由来する文字は、一神教の流布を支えた媒体でもあるからだ。フェニキア文字、ヘブライ文字、アラム文字のそれぞれの初期形態はかなり似通っており、共通の文字も多い。アラム文字は、紀元前 11 世紀から前 10 世紀頃にフェニキア文字から派生してできた文字だが、内陸交易に広く使われた。この文字はやがて楔形文字に代わるように西アジアで用いられるようになっていった。

旧約聖書は主にヘブライ語、一部はアラム語（聖書アラム語）で書かれているが、使われている文字は同じである。言うまでもなく旧約聖書はユダヤ教・キリスト教の正典であり、そうした宗教共同体の基礎をなすテクストである。ヘブライ文字は、局所的な共同体の多神教とは異なる宗教、一神教的な形態をとる宗教のテクストを書き記す文字となった。

一神教は土着の諸々の宗教を越えて、それを相対化しつつ、さまざまな共同体に妥当するような価値や規範を示しうる宗教である。ユダヤ教とキリスト教徒という一神教が生まれたのが、表音文字が生まれた場所と同じく東地中海地域であったのは、おそらく偶然ではない。土着の共同体の宗教や神話体系などから切り離された一神教の成立と、土着の共同体の意味作用や権力作用から切り離された表音文字の成立は、同じ社会背景に基づいているように思われる。いずれも人・物・情報などの往来や交易など社会的交通が著しく、それが結節する場に成立したと考えられるだろう。

４．東アジア（東ユーラシア）における漢字の形成と展開

甲骨文字は、漢字の原初形態とされてきた。しかし近年の調査研究によって、甲骨文字以前の文字記号の諸相が少しずつ明らかになってきている。新石器時代に属する仰韶文化（紀元前5000～前2500年頃）や、竜山文化（紀元前2500～2000年頃）── とくに黄河下流域の山東竜山文化 ── の遺跡からは、文字めいた記号が刻まれた陶器が発見されている（落合2014：15-18）。後続する二里頭文化（紀元前20～前16世紀）の時代には、原初的な王権社会の形成とともに、文字も出現していた可能性が高く、二里岡文化（紀元前16～前14世紀）の殷王朝前期の遺跡からは、文字が刻まれた骨片がわずかではあるものの出土している（落合2014：18-20）。こうした遺跡から、新石器時代以来の長い期間を経て、漢字の原型となる文字が作られたことが推測される。

殷王朝の後期、すなわち殷王朝中期の分裂が収まり再統一された時期から、甲骨文字がさかんに使われはじめた。紀元前13世紀頃である。ここでまず文字と権力作用との関係が注目される。王権がある程度整備された時期に、甲骨文字が多数登場するからである。

よく知られているように、甲骨文字は神の意思を占うという行為と密接に結びついている。占いという超越的な存在者の意思を知ろうとする行為から、つまり超越的な存在者を媒介として文字が誕生していることは興味深い。超越的な神々を措定しつつ、その意思を問うという形で甲骨文字が形成され、王の周囲で定着していった。

神意を問う占いは儀礼的な場面で繰り返された。占われた内容は、禍や祟りの有無、王の行動の是非、天候、穀物の稔り、戦争、祭儀挙行の是非、王妃の出産、王の疾病など、基本的には王や王族に関する事象や、王権の政治運営にまつわる事象に限られている（高島2015：80）。占いを行う者は「貞人」と呼ばれ、王の近傍で職能的な小集団を組織した[14]。

もっとも、甲骨文字は単なる占いとその記録ではない。白川静は次のように的確に指摘している。「卜占という行為は、素朴な心意においては、すべてを神の心に託するものであるけれども、すでに強大な権力をもち、その権力のもとに王朝の営みが行なわれている時代には、その権力に基づく行為が同時に神意にもかなうものであることを、すべての人に諒解させるための、一つの儀礼にすぎないものであった」（白川［1987］1994：228）。甲骨文字を生み出したような占いは、部族共同体における占いのごときものではなく、集権的な王権の政治秩序に組みこまれた占いであり、王の神聖性と王権の正当性を補強する儀礼であったといえよう。甲骨文字の刻まれた亀甲や獣骨は価値あるものとみなされ、占いの後にも廃棄されずに、半地下式の穴倉などに丁寧に収蔵・保管された（阿辻2005：19-20）。

もとより政治的な支配は、正当性や正統性を要求するものである。王の近傍で刻まれた後、収蔵されていった文字や文章は、実際のところ読まれる機会は少なかっただろうが、王の判断を権威づけ、その支配の正当性や正統性の根拠となるものの一つであった。

甲骨文字のほかには、青銅器に鋳込まれている文字がある。殷の時代の青銅器は、食器、酒器、楽器として祭祀に使われていた。それらには文字が記されていないものも多く、記されていても

たいていは字数がさほど多くない（阿辻 1999:43-45）。周代になると、青銅器は王から臣下への贈与の際にも作られるようになる。王が貴族を官職に任命する際や、王が諸侯を封建する際に、主として任命・封建された人々の側が青銅器を製造した。

青銅器の銘文（金文）には、器の制作者や祭祀の対象者、（王から臣下への贈与の理由となる）功績などが記された。周代の青銅器は、儀礼（賜与儀礼や冊命儀礼）の際に製造されたものであり、そうした儀礼の経緯や様子を記述した金文が存在する。文字が儀礼的な場面に絡んでいるという点では、甲骨文と同様である。

銘文は次第に長くなり、文字数も増加していった。ところで銘文の多くが器の内側に記されていることからわかるように、人に読まれることを想定したものではない（阿辻 2005：23）。むしろ、むやみに人目に触れない方が望ましかったのかもしれないとさえ思われる。こうした銘文はおそらく先祖（の霊魂）のような存在者に向けられていたのだろう。青銅器は、一度作られるとよほどのことがなければ損壊しないという耐久性がそなわっており、銘文で言及された者を永く権威づけることを企図した威信財でもある。ともあれ、文字とその使用者は、周の王室から諸侯へと徐々に広がっていった。甲骨文や金文が記された殷・周の時代が、漢字の形成・発展期であるといえよう。

殷・周王朝において形作られ、発展し、次第に各地に広まっていった文字は、秦帝国において統一が試みられる。秦の始皇帝による文字統一は有名である。地方（王権）によって異なることもあった字体や用字法などの統一が企てられ、帝国の政治を担う「帝国の文字」が形成された。むろん帝国は、複数の王権を統合するような極めて大規模な社会である。帝国の正式な文字（の書体）は「篆書」（小篆）であるが、実際に各地の行政で使われたのは「隷書」である（大西 2009：128）。隷書体で記された木簡・竹簡は、行政的な事柄を伝達し記録した。以上のように甲骨文、金文、篆書といった文字は、神々や先祖といった超越的な存在者、王や皇帝といった集権的な存在者 ── つまり王権的・帝国的な社会に規範をもたらすような中心的な存在 ── との関係をとどめる文字であるといえる。

宮崎市定（［1955］2002：65）は、漢字は「象形文字から音符文字へ発達しかけた過渡の形」であり、いわば「中途半端で止まった」文字であると指摘する。その理由を宮崎は「文字が完全に庶民のものになりきれなかった」ことに見出しているが、それはアルファベットでも（社会の近代化が進行するまでは）事情はさほど変わらないので、別の理由で説明されねばならない。エジプトの象形文字からフェニキアでアルファベットが形成されるに至るまでには、さまざまな共同体を横断し、文字体系の転用と再編成が繰り返されたわけだが、漢字の形成にはそうした転用や移動が比較的乏しかったためではないだろうか。白川の次の言葉は、こうした事態を表していると思われる。

> 象形文字はほか〔中国以外〕の地域では早くなくなって、すべてアルファベットになってしまう。それは文字が成立した神話的な世界を、その古代王朝がどこまで持続することがで

きたか、という問題です。古代王朝が滅びて、代って他の民族が支配し、他の系統のことばが入ってきたりして、文字はその表記のために転用され、アルファベットになってしまう。カナのように音だけを表すものになってしまう。

中国では、そういう文化的征服を受けることがなかった。だから象形文字がいまでも残っているのです（白川［1990］1996：343、〔 〕内は引用者）。

漢字体系の形成には表音という契機がなかったわけではなく、むしろ表音という契機がなければ漢字の体系は成立しえなかった（河野 1994：13）。だが、形声文字が漢字の大部分を占めることからわかるように、表音性に特化することなく ── 脱・表意化を徹底することなく ── 表意性と表音性をほどよく混ぜ合わせることによって漢字の体系が成立した。表音性に特化した文字では、たとえばフェニキア文字が22文字からなるように文字体系を構成する文字数は少なくてすむが、表音性と表意性を組み合わせて造字する漢字では、文字数は多くならざるをえない。

表音性に特化していったアルファベットと異なり、表意性を色濃く残した漢字は「言語に対して独立性のある文字」（宮崎［1955］2002：67）である。宮崎市定によれば、言語に対する漢字の独立性（あるいは不従順性）はかえって利点もあり、「それがあったればこそ漢字はその発音を変ぜられることを覚悟して、中国語と同系統の民族の中へ、そのままの形で広がって行くことができた」（宮崎［1955］2002：66）のである。

社会構造という観点から見れば、次のようになるだろう。王権的な社会編制では、コミュニケーションの範囲が対面的な相識関係を大きく超えることのないような局所的な諸共同体と、それらを包括する広域的な共同体という二重構造がみられる。帝国的な社会編制では、諸々の広域的な共同体を包括するような、さらに高次の共同体が存立していると考えられる。近代化が進むまで、文字の読み書きを日常的に行うことができたのは、支配者層の一部や知識層におおむね限られていた。王権的な社会にせよ帝国的な社会にせよ、「文字」は局所的な共同体のメンバーからみれば、おおむね日常生活に不関与で疎遠なものであった。局所的な共同体のメンバーのほとんどは文字の読み書きができず、文字というものの存在すら知らない者も少なくなかった。

ここで再び貨幣の使用に触れておこう。殷・周時代においては子安貝を用いた貝貨が使われることがあったが、周代には金属（とりわけ銅）を用いた貨幣が造られるようになる。春秋時代の中期には「布銭」、その末期には「刀銭」、戦国時代末期には「円銭」が造られ、各地で流通圏を形成した（湯浅 1988：95-96）。秦帝国においては、地方（の王権）ごとに使われていた貨幣も統一された。貨幣がポランニーの言う「特定目的貨幣」から「多目的貨幣（全目的貨幣）」へと変容していったように、文字もまた甲骨文や金文のように限られた目的に用いられた「特定目的文字」から「多目的文字」へと移行し、多様な用途で使われるようになっていった。同時期に出現したさまざまな思想、つまり春秋・戦国時代における諸子百家の思想も、その少なからぬ部分は文字を用いて記すことによって可能になったものだろう。

なお、隋朝以降に実施された官吏登用試験である科挙では、儒教の経典について出題され、答

案は「正しい（と認められた）字体」で記さねばならなかった。読み書きに習熟し、文字で記された古典的・儒教的な知識に精通していなければ合格できなかった。統治機構を担う人物には、文書行政を円滑に行う能力のみならず、文字に基づく知識（古典的教養）に通じていることが求められていたわけだ。

漢字の体系は、（後漢以降の）書写材料としての紙の普及、（おそらく唐の時代における）木版印刷術の発明、その印刷用の書体である「楷書」の成立をもって「完成」したと考えられる（大西 2009：151-152）。さらに注目したいのは、唐帝国が衰亡した 10 世紀頃から、中華帝国の周辺部では漢字をもとに文字がいくつか作られたことである。10 世紀に契丹（遼）で契丹文字（契丹大字・契丹小字[15]）が作られたのをはじめ、11 世紀前半に西夏では西夏文字が制定された（1036 年）。西夏文字は、漢字の構成原理を利用して作られた文字でありながら、漢字と共通する文字がなく、その意味で自立性の高い文字体系である。女真（金）は 12 世紀前半に女真文字を作った。これらの文字はいずれも、文字を制定した王権の衰亡とともに、次第に用いられなくなっていった。文字体系が王権と深く結びつき、当の王権を越えて使われるような、時間的・空間的な広がりを獲得しえなかった。

他方で中華世界の南方に位置するベトナムの王権では、11 世紀頃からチュノム（字喃）が使われ、「漢字チュノム交じり文」でもって文章が綴られるようになった。チュノムは漢字・漢文と共存するかたちで、王朝が交替しても使われ続け、20 世紀半ばにクオック・グーに取って代わられるまで使用された[16]。日本におけるカタカナ・ひらがなは、漢字をもとに作られた文字のなかでは例外的に、今日に至るまで使われ続けている。漢字・漢文を自らの言語（俗語）の語順で読んでいく「訓読」という方法 ── 一種の翻訳といえるだろう ── も、中華世界の周辺で用いられることがあった（金 2010：94-175）。

中華帝国の周辺地域へと普及していった漢字（の字形や構成原理）を参照しながら、独自の文字を形成していった文字（いわゆる「漢字系文字」）には、多かれ少なかれ中華世界への対抗意識と漢字との差異化がうかがえる。その意味では、帝国の「中心」を明に暗に意識した文字群であるといえよう。

漢字（および漢字文化）への対抗という点では、元朝のフビライ・ハーンのもとで製字されたパスパ文字も同様である。パスパ文字は、漢字という帝国の文字に対抗しながら自ら帝国の文字となった。この文字は元朝の公用文字であったものの、正式に用いられたのは約 100 年間（1269～1368 年）にすぎない（中野［1971］1994：136）。そして興味深いことに、パスパ文字は漢字を参照して作られた文字ではなく、チベット文字を中心に、コータン文字、デーヴァナーガリー文字といったインド系の文字から着想を得て作られた文字である（中野［1971］1994：100-118）。インド系の文字が、地中海周辺で生まれた文字から派生してきた文字であるとすれば、パスパ文字はユーラシアの東ではなく西で生まれた文字の系統に属する文字である。

さらに付言すれば、このパスパ文字を参考にして、15 世紀半ばに朝鮮半島で「訓民正音」（ハングル）が作られた。ハングルについては、いくつか特筆すべき点がある。ハングルは、字形が

漢字と全く異なるうえ、漢字のような表語文字ではなく表音文字である。ハングルがどのような文字をもとに作られたのかははっきりしないが、パスパ文字を主に参照したという説がある（河野 1994：155-156）。ハングルの製字にあたっては中国音韻学による音韻分析がヒントになったとはいえ、この文字は漢字ではなく西方から到来してきた文字（の系統）を参考にして作られている。ユーラシアの西で生まれた文字の系統は、延々と東進してきた結果、ついに極東の半島にまで到達し、漢字圏（漢字文化圏）を侵食するような作用を及ぼしたわけである。ハングルの創製にあたって漢字を主たる参照項としなかったことは、中華世界から距離を置き、その支配圏から離脱しようとする（李氏朝鮮の）傾向を垣間見ることができる。ハングルについては別稿で、近代的な文字を論じるなかで取り上げることとする。

５．結びにかえて

ここまで述べてきたことをまとめておこう。殷における甲骨文字の出現は、部族社会とは異なる大規模な社会の形成、つまりある程度発展した王権社会の形成と並行していた。それは殷の王権のもとで作られ、王権の正当性を補助する媒体であった。周の時代に王から臣下への贈与（任官・封建など）を機に作られた青銅器には、しばしば銘文が鋳込まれており、文字の使用が王の近傍から各地に広がりつつあったことがわかる。その後、秦が成立し、集権的な権力がより強化されていった帝国的な社会のもとで、漢字の体系も統一が試みられ、整備されていった。甲骨文、金文、篆書などから垣間見えたように、それらは神々や先祖といった超越的な存在者、王や皇帝といった集権的な存在者 ── つまり王権的・帝国的な社会に規範をもたらすような中心的な存在 ── との関係をとどめていた。象形性と表意性を残した漢字は、その成立に関わった神話体系や世界観の痕跡を字形にとどめ、それらを解明することが今日でも文字学の課題の一部となっている。10 世紀以降、漢字を参照しつつ作られた「漢字系文字」にしても、中華世界の中心 ── それは朝貢関係にみられるような再分配機構の中心でもある ── への参照関係をはらんでいた。

ヒエログリフはよく知られているように、古代エジプトの王権のもとで作られた文字である。上エジプトの王権と下エジプトの王権が統一され、王権が強化される頃からヒエログリフは使われ始めた。文字が王の近傍で形成され、王権の伸長と関わっている点は、古代中国の甲骨文字と同様である。だがエジプトで作られた文字は、それがエジプトを離れて移動・転用されるうちに脱・表意化し、表音文字としての性格を強めていった。アルファベットは、集権的な権力の中心、そして王権の再分配機構から逸脱していくことによって ── いわば脱中心化することによって ── 形成されたといえよう。結局、単音アルファベットのいわゆる「ニュートラルな性格」や「普遍性」は、それがおびただしい社会的な交通のただなかで形成されたことに由来する。

フェニキア文字やアラム文字は、交信、植民活動、海上交易や内陸交易において活用された。ギリシア文字は、哲学のような普遍性と指向する知の形成に寄与した。フェニキア文字に由来する文字が、ユダヤ教やキリスト教の宗教共同体の基礎となるテクストを構成する文字になったこ

とからわかるように、（脱中心化ばかりではなく）再中心化の方向性も見逃せない。ともあれ、表音化・脱表意化を徹底させたアルファベットと、表音化が「中途半端」にとどまった漢字との違いは、以上のような事情に淵源している。

また、文字と貨幣の関係についても言及した。いずれも局所的な共同体の範囲を超えても使われる間・共同体的な媒体（メディア）であるといえる。もっとも、古代において文字が作られた場所で、つねに貨幣経済が展開していたわけではない。たとえば古代エジプトでは、紀元前3000年頃には文字の使用がみられるが、貨幣経済が出現するのはかなり後の末期王朝の頃になってからである。

東野治之は東西の貨幣史を比較して、それぞれを次のように特徴づけている。東（中国文化圏）の貨幣は、政府の権威が価値の裏づけになっており、「国家が作り出した支払い手形のようなもの」（東野 1997：60）だった。東の貨幣は「国家からの放出、国家への環流を意識した通貨」であり、きわめて閉鎖的な本質をもっている（東野 1997：61）。それに対して、西（小アジアおよび地中海世界）の貨幣は、国境や民族をこえて流通する貿易貨幣としての性格を持っていた（東野 1997：56）。両者の性質や使われ方の違いは、主に再分配機構のなかで活用される貨幣と、主に市場交換の場で活用される貨幣という違いでもあろう。東野の指摘は、ここまで論じてきた東西の文字の違いについてもあてはまる部分があるだろう。もっとも、再分配機構と市場交換とは複雑な関係があり（大澤 1992：487-502）、あまり単純に論定するわけにもいかない。貨幣（史）と文字（史）との関係は、今後さらに追究する必要がある。

さて、東地中海で形成された表音文字は、王権的・帝国的な社会のもとで使用されても、その範囲を超えて広がっていった。フェニキア文字に由来する文字のなかでも、ギリシア文字を経由してラテン文字を形成した系統（つまり西へと展開していった文字系統）は ── どちらかといえば母音よりも子音の表記を優先・優越させる東の系統とは異なり ── 子音と母音を平等に表記するアルファベットであるが、それがいよいよ活用され、いわばその潜在的可能性が発揮され、世界的に展開したのが近代世界である。他方で中国および台湾と日本では、今も漢字が使われ続けている。こうした文字の近代的性格の諸相については、稿を改めて論じることとしよう。

註

1）ただし、いわゆる社会学には属さないが、文字の置かれた歴史的・社会的文脈を考察の中心に据えた書物としては、阿辻（1999）や鈴木（2018）がある。

2）文字の機能・種類として、「表音（文字）」「表意（文字）」「表語（文字）」などがあると言われるが、これらの概念を河野六郎（1994）に沿って整理しておきたい。河野によれば「すべての文字の窮極の言語的機能は表音でも表意でもなく、表語にある」のであり、「ある文字が表音文字であるとか、表意文字であるとかいうのは、その文字の表語の仕方について言っているのであって、どんな文字でもいかにして語を表わすか、すなわち表語がその直接の目的である」（河野 1994：89）。表音文字の場合ですら、表語は文字の根本的機能を果たしており、（形態素やスペリングといった）表音要素の結

合が一つの表語単位をなしている（河野 1994：20）。

3）ガウアーは、「われわれが過去二千年間に知っているほとんどすべての文字体系は、中国文字とコロンブス以前のアメリカ文字を除けば、前第三千年紀後半の〈肥沃な三日月地帯〉を源としている」と述べている（Gaur 1984=1987: 70）。

4）シュマント＝ベセラの説に対する批判については、常木（1995：154-155）や前田（2003：38-39）などを参照のこと。

5）古代文字のひとつであるインダス文字は、長文が綴られた形跡はなく初歩的な段階にとどまり、おそらく用途も限られていた。後代の文字にもさして影響を及ぼしたとは思われないので触れないこととする。とはいえ、ここでも都市的な空間の成立と文字の成立との関連は認められよう。

6）ウルク期に先立つウバイド期（紀元前5500年頃から前3500年頃まで）の都市や集落では城壁を築くことがなかったが、ウルク期に堅固な城壁で囲んだ都市が築かれるようになったという（松本 1995：193）。城壁に囲まれることによって物質的にも外の空間とは区別された本格的な都市（の原型）の出現と、文字（の原型たる絵文字）の出現とが近い時期にあることは注目に値する。

7）ここでいう決定詞とは、同音異義語を区別して意味を限定するために加えられる文字のことであり、決定詞として用いられた場合、それ自体は発音されない。

8）ウガリット文字は、ウガリット楔形文字あるいはウガリット・アルファベットとも呼ばれる。紀元前1200年頃にウガリットの王権（都市国家）が滅亡するとともに、文字も使用されなくなっていった。

9）ナヴェーによると、フェニキア文字碑文はフェニキアの中心地域だけではなく、キリキア（トルコ南部）、メソポタミア、パレスチナ、エジプトおよび他の北アフリカの国々、地中海諸島、南欧など広い範囲で発見されている（Naveh［1982］1987=2000: 71）。

10）現在見つかっているもので最初期のギリシア文字は、前8世紀のものである。

11）タレスとほぼ同時代に生きたアナクシマンドロスは、万物の根源をいささか抽象的に「無限なもの（ト・アペイロン）」と捉えたが、彼はギリシア文字の起源について考察をめぐらしていたことが、間接証言ながら明らかにされている（廣川 1997：57）。

12）トムソンによると「原始的思惟」においては社会と自然は一体化していたが、アナクシマンドロスは自然を客観化、ソロンは社会を客観化した（Thomson 1955=1958: 270）。つまりこの時期（紀元前7-6世紀）に、自然であれ社会であれ、それらを対象化し把握する視点が形成されたわけである。またトムソンは、ギリシア哲学と貨幣経済の急激な発展との関連を示唆している（Thomson 1955=1958: 312-313, 362）。

13）たとえばスパルタでは、アテナイに比して文字の使用領域がさほど多岐にわたってはいなかったようである（Boring 1979）。

14）ただし、甲骨文字を刻んだのは、占いを実践する貞人とは異なる人物だったと考えられている（阿辻 2009：47-48）。

15）契丹大字は漢字を模倣した表意的な文字であるが、契丹小字はウイグル文字あるいは突厥文字を参考にした表音文字である。あえていえば契丹大字は東の系統に属し、契丹小字は西の系統に属するのであり、両系統の接点の一つがここに認められる。

16）この段落の記述は、主に岩月（2009）を参照した。

参考文献

阿辻哲次，1999，『漢字の社会史 ── 東洋文明を支えた文字の三千年』PHP研究所.

────，2005，「人は何のために文字を書いたか ── 中国での文字の発生」平川南編『古代日本 ── 文

字の来た道』大修館書店，14-31.
————，2009，『漢字文化の源流』丸善株式会社.
Boring, Terrence A., 1979, *Literacy in Ancient Sparta*, Leiden: Lugduni Batavorum E. J. Brill.
Chadwick, John, 1987, *Linear B: and Related Scripts*, London: British Museum Press.（= 1996，矢島文夫監修，細井敦子訳『線文字 B ── 古代地中海の諸文字』學藝書林.）
Havelock, Eric A., 1963, *Preface to Plato*, Massachusetts: Harvard University Press.（= 1997，村岡晋一訳『プラトン序説』新書館.）
————, 1986, *The Muse Learns to Write: Reflections on Orality and Literacy from Antiquity to the Present*, New Haven and London: Yale University Press.
廣川洋一，［1987］1997，『ソクラテス以前の哲学者』講談社.
Gaur, Albertine, 1984, *A History of Writing*, London, The British Library.（= 1987，矢島文夫・大城光正訳『文字の歴史』原書房.）
Gelb, I. J., 1952, *A Study of Writing: the Foundations of Grammatology*, Chicago: the University of Chicago Press.
岩月純一，2009，「漢字と「漢字系文字」」宮本徹・大西克也編『アジアと漢字文化』一般財団法人・放送大学教育振興会，217-232.
加藤一朗，1962，『象形文字入門』中央公論社.
金文京，2010，『漢文と東アジア ── 訓読の文化圏』岩波書店.
河野六郎，1994，『文字論』三省堂.
近藤二郎，2003，「地中海域の古代文字」菊池徹夫編『文字の考古学Ⅰ』同成社，103-133.
Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.（= 2009，馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会 1・2』法政大学出版局.）
前田徹，2003，「メソポタミアの楔形文字」菊池徹夫編『文字の考古学Ⅰ』同成社，17-61.
町田和彦編，2011，『世界の文字を楽しむ小事典』大修館書店.
真木悠介，［1981］1997，『時間の比較社会学』岩波書店.
松本健，1995，「都市文明への胎動」江上波夫監修，常木晃・松本健編『文明の原点を探る ── 新石器時代の西アジア』同成社，182-200.
宮崎市定，［1955］2002，「中国古代史概論」『アジア史論』中央公論新社，45-86.
中野美代子，［1971］1994，『砂漠に埋もれた文字』筑摩書房.
Naoki, Sakai, 1991, *Voices of the Past: the Status of Language in Eighteenth-Century Japanese Discourse*, Ithaca: Cornell University.（= 2002，酒井直樹監訳，川田潤・齋藤一・末廣幹・野口良平・浜邦彦訳『過去の声 ── 十八世紀日本の言説における言語の地位』以文社.）
Naveh, Joseph,［1982］1987, *Early History of the Alphabet: An Introduction to the West Semitic Epigraphy and Palaeography*, Second revised edition, Jerusalem/Leiden: Magnes Press/E. J. Brill.（= 2000，津村俊夫・竹内茂夫・稲垣緋紗子訳『初期アルファベットの歴史』法政大学出版局.）
大西克也，2009，「隷書の誕生と文字統一 ── 古代文字の終焉」宮本徹・大西克也編『アジアと漢字文化』一般財団法人・放送大学教育振興会，115-136.
————，2009，「漢字の完成 ── 楷書の誕生と規範化」宮本徹・大西克也編『アジアと漢字文化』一般財団法人・放送大学教育振興会，137-156.
大澤真幸，1992，『身体の比較社会学Ⅱ』勁草書房.
Ong, Walter J., 1982, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, London, New York: Methuen & Co. Ltd.（= 1991，桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店.）

落合淳思，2014，『漢字の成り立ち ──『説文解字』から最先端の研究まで』筑摩書房.

Schmandt-Besserat, Denise, 1996, *How Writing Came About*, Austin: University of Texas Press.（= 2008，小口好昭・中田一郎訳『文字はこうして生まれた』岩波書店.）

白川静，［1987］1994，『文字逍遥』平凡社.

────，［1990］1996，『文字遊心』平凡社.

鈴木董，2018，『文字と組織の世界史 ── 新しい「比較文明史」のスケッチ』山川出版社.

高島敏夫，2015，『甲骨文の誕生 ── 原論』人文書院.

Thomson, George, 1955, *The First Philosophers (Studies in Ancient Greek Society, Vol.2)*, London: Lawrence & Wishart Ltd.（= 1958，出隆・池田薫訳『最初の哲学者たち』岩波書店.）

東野治之，1997，『貨幣の日本史』朝日新聞出版.

常木晃，1995，「交換，貯蔵と物資管理システム」江上波夫監修，常木晃・松本健編『文明の原点を探る ── 新石器時代の西アジア』同成社，146–167.

湯浅赳男，1988，『文明の「血液」── 貨幣から見た世界史』新評論.